

定年に臨んで

尾崎 昭美

昭和41年に就任して以来、この37年数ヶ月はあっという間に過ぎ去りました。愛知大学に来た頃はまだ定年制というものもなく、ある年度からこれが実施されると、大学を去られる人と、新しく来られる人が交錯し、そういう方々との教育機関の中で時間を共有しながら、今日までを過ごして来ました。誤算は最後の2年足らずを学生部の仕事に割かなければならなくなったことです。いつまでたっても未熟の感が抜けない小生が何らかの形で、大学のお役に立つかもしれないということに、辛いながらも喜びも感じないとは言えないものの、身の整理と研究生活の仕上げに費やす積もりでいた予定が大いにくるってしまいました。

身の整理の大半を占めるのが、研究室の明け渡しであり、あと半年で空にすることに待ったはありません。研究の仕上げは、「モーリアックの小説に現れた動物と植物」を完成させることでしたが、遂に手をつけることができませんでした。この文章も夏休みに書いておく予定でしたが、締め切り前日の29日に漸くワープロに向かっているという体たらくです。とはいえ、かくも長い期間、喜びを感じながら、奉職することができたのは、良好なる人間関係のしからしめるところと確信します。1970年前後に確認された、大学当局、教職員組合、学生自治会（これを三者協議会と呼んだと記憶します）による合議という体制がその後、否定されたという話は聞いていません。それは曲りなりにも機能していると思います。そういうなかで思想、信条の自由が保障され、何でも各自信じることを自由に発言できる雰囲気は、愛知大学の宝として、永遠に守らなければならないと思います。

大学の37年前を考えると今昔の観があります。教育研究施設の充実は当時であっては思っても及ばぬものだったでしょう。物質的な条件は改善という言葉では追いつかないほど充実しました。しかし当時を知るものの一人として、何かが悪くなっているという思いが抜

けません。それは日本、いや、世界の動きと呼応するものかもしれません。学内で言えば、卒業必要単位は減らされ、カリキュラムも合理化されて来ているようです。効率の重視は、余分を許しません。しかし余分なものの中に大切なものがあると信じます。学部が増え、外国語研究室の体制も整備されました。学生の語学力習得のために、物質的な条件整備は勿論重要ですが、効率の名による教育システムの改悪は避けたいものです。

とはいえ、本学に奉職したことを誇りとして、退職することができることは、何とも嬉しい限りです。これも同僚の諸先生や事務職の方々の御蔭と心から感謝する次第です。本当に有り難うございました。